

平成12年度第2回企画展

日本ロマン派の若者たちの軌跡 「ある詩人の交友録・牧野徑太郎コレクション展」 はじまる!



会期: 平成12年10月7日(土)~12月10日(日) 会場: 荒川ふるさと文化館1階企画展示室

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(12)0039-1号

この写真は、ある詩人の出征前夜の壮行会で撮影されたものです。ここに集つたのは、正装の若者と詩人の人生に大きくかかわった一風変わった画家。かれらは、ある世界とともに生きた仲間たちである。ある世界とは「日本ロマン派」という文学世界です。

本年度第2回企画展は、「戦場のボレロ」の著者で、東日暮里在住の詩人牧野徑太郎氏のコレクションをどうあげます。

牧野氏は、詩の世界に導いた師・萩原朔太郎、小説の師・中谷孝雄をはじめ、伊東静雄・浅野晃・保田與重郎・中河與一・山岸外史・木山捷平・檀一雄・富士正晴・三島由紀夫・林富士馬・近藤芳美・麻生良方・世耕政隆ら近現代の作家等と交流をもち、直筆原稿・色紙・短冊・書簡・書籍・雑誌等を多数所蔵しています。また、世界的評価の高い板画家の棟方志功と親交が深く、棟方から送られた肉筆画、詩集の装幀の原画などの作品を所蔵することで知られています。このコレクション一つ一つは、牧野氏の人生の時々からにじみ出た文学という「雲」の具象体といえるでしょう。

牧野氏の少年・青年時代は文学に明け、文学に暮れた毎日でした。昭和7年(1932年)、保田與重郎・田中克己・小高根太郎らによつて、ドイツ浪漫主義・日本の古典への憧れと美への志向を説く雑誌『コギト』が誕生しました。さらに、昭和9年2月のナルプ(日本プロレタ

リア作家同盟)解散後の浪漫主義思想台頭の機運のなかで、同11月には『コギト』に「日本浪漫派廣告」が发表され、翌10年3月の雑誌『日本浪漫派』発刊へと続きます。発起人は神保光太郎・龜井勝一郎・中谷孝雄・保田與重郎ら6人です。昭和12年(1937年)には朔太郎も参加します。日本ロマン派と呼ばれる文学の世界に傾倒していく若者の中に中学4年生(旧制)の牧野氏がいました。そして、さまざまな交流が始まっています。政治学者の橋川文三が「いわゆる右翼・ファシスト的觀念論に嫌惡を感じていた若い世代が、保田の國粹的神秘主義にはかなり容易にいかけた」と『日本浪漫派批判序説』で自らの経験を語ったように、出征の日が近づく中、文学少年・青年たちは、日本ロマン派の世界で、言葉を紡ぎ・編み、さらに日本の伝統・文化、文壇のあり方、作品を論じ続けることに没頭していくのです。

本展では、日本ロマン派の若者の活動の紐帯であった雑誌のうち『帰郷者』『まほろば』『ブシケ』『新現実』などの同人誌に着目し、牧野氏ら日本ロマン派の若者たちが理想としめざした文学の世界を次のコーナーから紐解いていきたいと思います。

「日本ロマン派の若者たちと同人誌」「棟方志功と日本ロマン派」「詩人の部屋」の各コーナーに、コラム「詩人の住む町—根岸」というところ「」を加え、牧野氏が育った根岸・日暮里界隈を地誌・錦絵・パネルなどで紹介します。

猫年アラカルト?! 改め
動物たちがゆく①

『猫が人を殺す話』



昔から動物があらかわにも生息していたのは間違いないでしょう。現代の私たちがその様子を知るのは容易ではありませんが、遺跡などから発掘される骨、関心を向けた人の記録、さらには伝承などからうかがい知ることができます。また、人は記録するだけでなく日常でも、「からすの行水」「猫に小判」というように動物を用いて事象を表現したりすることもあります。十二支は一現代では一般には使われませんが一時刻や方位を表す点でその一つといえるでしょう。さて今回は、そのような身近な動物の中から、あらかわにまつわる猫(?)の話をしましよう。

幕府の御用彫金師・黒川家の史料群
〔伊藤家文書・区指定文化財〕の中に、次のような瓦版があります。(写真)

「元次郎の死体が」出てきた。さあ、これはあの猫のしわざだ、ということはありませんが、遺跡などから発掘される骨、関心を向けた人の記録、さらには伝承などからうかがい知ることができます。また、人は記録するだけでなく日常でも、「からすの行水」「猫に小判」というように動物を用いて事象

を表現したりすることもあります。十二支は一現代では一般には使われませんが一時刻や方位を表す点でその一つといえるでしょう。さて今回は、そのような身近な動物の中から、あらかわにまつわる猫(?)の話をしましよう。

この話は、当時巷をにぎわした話だったようで、このほかにあと二つは瓦版があり、世の風聞を集めた『藤岡屋日記』にも記事をみつけることができます。町奉行所の隠密廻などはこの風聞の調査までしています(内閣文庫所蔵史籍叢刊 安政雑記 162頁)。

さて、当時の村や町、寺社は、変死人が出ると担当役所に届け出て「檢使」を派遣してもらい、現場検証をしてもらわなくてはなりませんでした。実は先の話、作り話ではないようで、元次郎の死体も寺社奉行所の「檢使」を受けております。

3月中旬、金杉村の百姓伊右衛門宅に白黒斑て尾が二股に裂けた猫が紛れ込み、次男元次郎と馴染み、側を離れなくなつた。27日、元次郎は猫を抱えてふつと出ていつたまま行方不明。さて、4月10日の朝、谷中天王寺の門番・喜三郎が境内の掃除をしていたところ、人の腕をくわえた犬が敷の中に入つていた。驚いて追つかけると腐乱死体が。早々に天王寺の役僧に知らせ、11日、寺社奉行所による現場検証があつた。死骸は12日の朝方に片付ら

になつて(谷中)天王寺の境内、敷の中から「元次郎の死体が」出てきた。さあ、これはあの猫のしわざだ、ということになつて、中村近辺の四村が相談し、

生捕りにしようということになつた。が、当の猫は容易には寄り付かない。油揚げにした鼠をダシにしてダメ。と、そこを「奥州浪人」が通り掛かつた。これ幸いと頼んで討ち取つてもらつた。見ると、それは犬より大きく、見た人は驚き呆れ、恐れない者はなかつたそな()内は筆者補足

この話は、当時巷をにぎわした話だ

ったよう

で、このほかにあと二つは瓦

版があり、世の風聞を集めた『藤岡屋

日記』にも記事をみつけることができ

ます。町奉行所の隠密廻などはこの風

聞の調査までしています(内閣文庫

所蔵史籍叢刊 安政雑記 162頁)。

さて、当時の村や町、寺社は、変死

人が出ると担当役所に届け出て「檢使」

を派遣してもらい、現場検証をしても

らわなくてはなりませんでした。実は

先の話、作り話ではないようで、元次

郎の死体も寺社奉行所の「檢使」を受け

ております。

3月中旬、金杉村の百姓伊右衛門宅

に白黒斑て尾が二股に裂けた猫が紛

れ込み、次男元次郎と馴染み、側を離

れなくなつた。27日、元次郎は猫を抱

えてふつと出ていつたまま行方不明。さ

て、4月10日の朝、谷中天王寺の門

番・喜三郎が境内の掃除をしていたと

ころ、人の腕をくわえた犬が敷の中に入つていた。驚いて追つかけると腐

乱死体が。早々に天王寺の役僧に知

らせ、11日、寺社奉行所による現場検証

があつた。死骸は12日の朝方に片付ら

れた(『藤岡屋日記』7巻、489頁)。

化猫が人を殺す?! 風聞・昔話なら

ともかく、現実世界では断じてありえ

ないこと。したがつて、寺社奉行所も

元次郎の死因を化猫のしわざとして

処理していることになります。

届け出なく村や町を出て行く「欠落

」という行為は、村や町にとつても罪に

なりましたが、18世紀の江戸では膨大

すぎて、すでに形骸化していたといわ

れています。実はこの話の元次郎も欠

落人であった可能性があり、つまりは社

会的に欠落人をこうした形で「処理」し

ていたのではないか。ちなみに、尾が

二股で斑の猫。案外、化猫の正体は女の

人で心中事件だった、とまでするのは

想像がたくましまさぎましょうか。

ともあれ、妖怪は「境界」に現れる

といいます。あらかわは、「江戸」と

いうエリアにおける「境界」にあたり

ます。そのため、化猫が人を殺す話は、

当時の人々にとって充分リアリティ

があつたのではないかでしょうか。加え

て、この瓦版では、「奥州浪人」が登

場します。ここには日光街道第一の宿

場である千住宿の近隣という地域性が

表されています。こうしたさまざまな地

域的イメージがあつて、この瓦版の読

者は変死事件を化猫のしわざとする仮

想世界を楽しめたのでしょうか。

ただ、瓦版を出版する人楽しむ人

というのはあらかわの人々とは限りま

せん。したがつて、この瓦版にみられ

る地域的イメージは、彼の人々が抱い

たあらかわの一つの歴史像であつて、

現実ではありません。しかし、そこか

ら私たちもあらかわの歴史像をつかむ

ことができるのです。

(亀川泰照)

タライムトシヌルズ⑥

鳩ヶ谷宿松坂屋ハ太郎ハ才の庚申塔
—オイラハ太郎。日光街道鳩ヶ谷宿の松坂屋の傍。文政8年(一八二五)酉年生まれ、数え八歳。オイラ、武藏国豊島郡新堀村でえどここに、庚申塔をたてたんだ。どんな庚申塔かつて。「猿田彦太神宮」つて立派な字が書いてあって、三匹のサルまで彫つてあるんだ。台にはオイラの名前も刻んでもらつた。新堀村のどこかって。たしか「おわさん」とかいうお社だつたと思うけど、よっぽはわからねえよ。でもさ、285年後の世界じや、なんだかオイラの庚申塔がなくなつちまつたつて、騒いでいるとかないとか、心配だな!

この「八太郎」の庚申塔は、天保3年(一八四八)11月に立てられた。はじめて公に紹介されたのは、昭和30年に刊行された『新修荒川区史』上巻の庚申塔一覧である。執筆は京橋図書館職員でもあつた編さん委員の安藤菊二。この春の当館館蔵資料展「区史編さんと歴史資料展」のための調査で、次の資料を確認し展示した。「別所光一書翰綴」(昭和28年)である。安藤は当時親父のあつた別所に区内各地の庚申塔・板碑等の調査を依頼していたようだ。昭和28年2月から3月までの別所の手紙が綴られている。これによれば、別所は昭和25年11月28日に諏方神社を訪れて庚申塔の調査を行つた。手紙にはスケッチと所在地を記すメモが添付されており(写真)、別所の恩師で『庚申待と庚申塔』の著者三輪善之助が実見し「唯一神道の猿田彦神の庚

中の荒四区① 埋蔵文化財最新ニュース

埋蔵文化財は地下にあるものなので、外から（上から）はわかりません。この保護には、掘り返さないことが一番ですが、現実の開発や土木工事に対応するために、文化財保護法が定められています。

まず工事計画を立てる際には、文化財保護法で定めるところの、「周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、包蔵地）」であるかどうかを、社会教育課が当館で確認してください。包蔵地であつた場合、工事を行う60日前までに届け出が必要になり、その後、試掘、もしくは立会い調査を行います。また、包蔵地ではないことが確認されても、工事中に遺跡が発見されれば、発見届が必要であり、やはり試掘調査が行われます。試掘調査は、遺跡の性格や範囲を知り、工事が遺跡の破壊につながるかどうかを確認するために行います。工事面積や深度に応じて試掘坑という穴を掘り、わかつたことを記録・保存します。ここで、工事が遺跡に遺跡の破壊などの影響を与える場合は、本調査を行います。

※ ※ ※

以下に最新の試掘調査について紹介します。

西日暮里3丁目。昭和62年に発掘調査された日暮里延命院貝塚をはじめ、石器や縄文土器などが出土しています。今回、個人住宅の建て替え工事に伴い、試掘調査を実施しました。

当該地は、日暮里延命院貝塚から約

70m程南西に下がったところに位置し、上野台地の谷地斜面部にあたります。上野台地は赤羽から上野に向かってのびる細長い台地で、武藏野台地の北東端に位置します。上野台地と本郷台地の間にのびる根津谷には、谷田川（現在暗渠）が流れています。

5月26日、試掘坑を2カ所設定したところ、縄文土器片などが出土しました。このため6月15・16日、人力による掘削、コンクリートなどの撤去作業を行い、地表面下約60cmまで達しました。コンクリートや、ぐり石などが混じっていたため、撤去に時間がかかりましたが、試掘坑の北東面に黒色土が見えはじめ、遺跡包含層と呼ばれる、昔の人びとが使った道具などが堆積した土の層が見つかりました。

縄文時代の「江戸名所図絵」を見ると、道があつたことがうかがえます。今後、この周辺の本格的な調査がなされるようなことがあります。こうしたことでもわかるかもしれません。

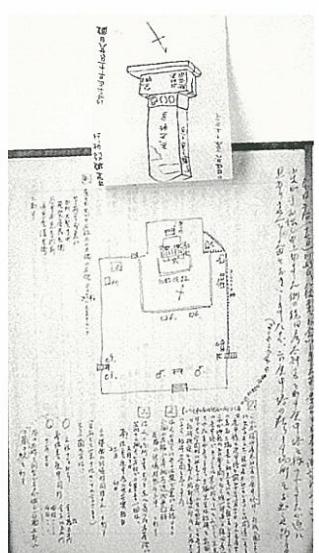
現在、上野台地は、西日暮里の切通し（通称、道灌山通り）によって区切られています。当時、地続きであつたのか、現在のようになつていただのかかりませんが、江戸時代の「江戸名所図絵」を見ると、道があつたことがうかがえます。今後、この周辺の本格的な調査がなされるようなことがあります。こうしたことでもわかるかもしれません。

※ ※ ※

一連の試掘調査は、区民の皆様のご協力のもとに行われており、遺構・遺物の有無に関わらず、あらかわの歴史を保護し、知る足掛かりとなる大切な活動です。ご理解いただき、今後ともより一層のご協力をお願いします。

*なお、荒川区教育委員会では、「埋蔵文化財保護の手引き」（平成10年）という案内を出しています。（参考ください。）

（八代和香子）



申塔であることは甚だ珍しい」という見解を示したとの記述がある（三輪がこの庚申塔を他に報告したかどうかは未詳）。別所のメモは、いくつかの点で意味をもつ。一つは、位置が記されていること。この手紙を確認後、「あらかわの庚申塔—付日待塔—」（平成2年）に収載できなかつた庚申塔を調査するため早速赴いたが、メモの位置は現在の社域からはずれて踏み込めないほど荒れており、残念ながら再発見には至らなかつた。しかし、形状・大きさ（台座を含め1m15cm）・銘文及びその配置が明らかになつたことは大きい。特に、新堀村、諏方神社の氏子域というエリア以外の人物の造立であること。そして、8歳の子供の造立であることには意味がある。地縁的構成員ではない講中による造立は、東日暮里の猿田彦神社の「猿田彦太神」を刻む庚申塔においてみられる（台座、本体同時造立を前提とする）。しかし、ここで造立主体は近隣とはいえない鳩ヶ谷宿の人物、単独でしかも8歳の子供である。庚申待ちを3年間やりとげた証としての庚申塔の造立というよりも、病気平癒など何らかの祈願を目的とした庚申塔という石造物の奉納の可能性を探らなければなるまい。この庚申塔は、

庚申塔の造立目的・立地の選定の変容、こどものまつり、寺社への石造物の奉納等を考える上で、貴重な例となり得るはずである。

それにしても「八太郎」の心配を解消するために、一日でも早く再発見を遂げたものである。（野尻かおる）

専門員は見た!①

埋もれる? 信仰生活

隅田川が大きくカブする荒川区南千住8丁目の旧汐入地区では、白鬚西地区再開発事業に伴い、民家の解体作業が行われている。平成10年10月末には、幕末期の建立で、地区的歴史を伝える民家として保存が望まれていた「旧高田安秀氏宅」も解体され、歴史の痕跡が消えていく瞬間を目撃した。汐入の開村伝承に登場する同家は、上杉謙信の臣下と伝える高田嘉左衛門(屋号「嘉左衛門」西の家)を先祖とし、汐入地区に多くみられる高田姓の総本家といわれている。

写真は、同じく草分けと伝えられる

高田七兵衛家(屋号「胡粉屋」東の家、家印△)の分家筋にあたる旧高田登志子邸(家印△)の敷地内に建てられていた石碑である。同家は南を正面として母屋が建ち、その左手に石段、その上に石灯籠(竿部の銘「御神口(燈力)」)と手水鉢、西面を背に小祠が建立されていた。その右手にあつたこの碑は、平成11年4月、同家の解体時に確認されたものの、残念ながら保存に至らなかつた記念碑である。

【表面】

「有明山、(本)神力講社開山、一心行者、初登山慶応元年、丑年四月八日、大塚 菩寿鑄印」

【裏面】

「俗名 高田鉄之助、行年五拾四才、明治四拾五年五月吉日、建主 高田善太郎、妻 高田セイ、伴 高田角太郎」

て、「奉 高田善太郎、セイ、角太郎」があつた。また当家には仏間西側に講印(本)が入った祭壇があつたが、一部を除き処分され、諸々の資料群は消えてしまつた。しかし解体時にいくつか収集された信仰関係資料の中に、近隣諸寺社の御札等のほか、有明山神社関連の御札と共に「長野県信濃国有明山神社真景全図」、明治34年10月5日に神樂殿・唐八足門手水舎の増築費用の寄付金(五拾錢)を高田善太郎氏(明治6年生、昭和9年逝去、27代当主)が収めた領取書、及び不動明王の図像と「信州五竜山」の文字が刷られた札等が確認された。同家の過去帳によると、石碑にみられた鉄之助氏は同家5代目当主。34歳で初登山し、後に行を積んで「一心行者」となつたのである。



保6年(一七二一)、「惣鎮守有明山戸放宮略記」に修驗宝重院宥快ほか16人によって開山され、その後修驗者によって開削された三つの登拝ルートが、近世中期以降、多くの信徒が登山し、山岳登拝の講を結社していくようである(『穗高町誌』二巻(歴史編上・民俗編)他)。こうしたこれまでの有明山信仰の諸相を伝える絵馬が神社や五竜山明王院正福寺(高山寺は明王院と和歌山県の真言宗三等格院を兼務していた僧法や檀家信徒の希望により同県根来寺末寺の正福寺と合併し、寺号を改称)に奉納され、登拝経路には講社の記念碑や供養碑、靈神碑などが多く建立されている。また「穗高町の石造文化財」をみると、個人の奉納(造立)を中心的に、地元および近隣地域からの奉納にまじり東京方面の講社による造立が目につく。写真にみえる「神力講」もその一つであった。同書には前述した碑文の高田鉄之助、善太郎氏の名もみえ、これによりこれまで区内で把握していなかつた有明山信仰(神力講)の存在を確認できた。

ところが、改めて地域を見渡すと同様の石碑が石浜神社(南千住3)参道左脇でも確認された「苦笑」。昭和2年建立の同碑には「徳義行者」の名、裏面「(本)東京神力講」の文字、建立者、そして「行者由来」等が記されている。

初代先達に「高田三次郎」の名、裏面「(本)東京神力講」の文字、建立者、そして「行者由来」等が記されている。この春、「荒川ふるさと文化館報(平成10年度)・荒川ふるさと文化館紀要第1号」(合冊)が刊行されました。日ごろの当館の活動、調査研究の成果をより詳しく紹介していきます。当館、区内図書館などで、ぜひ一度御覧になってください。

館報 荒川ふるさと文化館の事業を具体的に報告!
内容: 文化財保護活動・資料保存活動・展示活動・講座ほか

紀要 荒川区の歴史・文化を紐解く手掛かりを提供!
内容: 文化財調査報告 浄光寺・銅造地蔵菩薩立像修復について
資料紹介 南千住石山家所蔵資料について
論考 三ノ輪町家持の語る町の歴史

された共通点を持つ。したがつて、汐入地区(橋場を含む)での有明山信仰の活動や両石碑の関係性を知る上で、まずは講の組織や構成員をそれぞれ確認したいところである。また、興味深いのは「徳義行者」の由来にみえる「御嶽信仰」や「神道修成派」(教派神道の一つ。明治末期には御嶽信仰や富士信仰などの山岳信仰を傘下に取り組む展開をみせた)の「中座先達」を務めたという記述、そして前掲報告書内にある東京(延)天神講の碑文にも同宗教の文字がみられることである。教化のために既存信仰が活用された一事例とだとすると、同地区における活動内容やその展開方法(地域的、一時的流行か同族間、同族的信仰か)、区外の有明山信仰の実態と諸宗教との関係性はいかなるものだったのか。同地区での聞き取りを中心に調査は今後も続く……

西山智香

ご存じですか?

~荒川ふるさと文化館の館報・紀要~

この春、「荒川ふるさと文化館報(平成10年度)・荒川ふるさと文化館紀要第1号」(合冊)が刊行されました。

日ごろの当館の活動、調査研究の成果をより詳しく紹介していきます。当館、区内図書館などで、ぜひ一度御覧になってください。

館報 荒川ふるさと文化館の事業を具体的に報告!

内容: 文化財保護活動・資料保存活動・展示活動・講座ほか

紀要 荒川区の歴史・文化を紐解く手掛かりを提供!

内容: 文化財調査報告 浄光寺・銅造地蔵菩薩立像修復について

資料紹介 南千住石山家所蔵資料について

論考 三ノ輪町家持の語る町の歴史